

# 生まれてから死ぬまで働き続ける 大切な**心臓**と**血管**を**病気**から守る。

ガンに次いで死亡原因の第2位となっている心臓病。特に心筋梗塞は、突然死んでしまうこともある恐ろしい病気です。その主な原因は、食生活の乱れや運動不足など不健康な生活習慣の積み重ねにあるといわれています。日頃心がけておきたい心臓病の予防法や心臓にまつわる疑問を豊橋ハートセンターの鈴木孝彦院長に聞きました。

聞き手> 柳瀬秀昭(トモエ薬品株式会社 代表取締役) / 内山匡真(エース山薬品株式会社 代表取締役)

豊橋ハートセンター  
鈴木孝彦 院長



柳瀬(以下、柳)：豊橋ハートセンターは、循環器(心臓と血管)の専門病院として海外からも高く評価されていると伺いました。特に心臓カテーテル(手首や足の付け根から細い管を血管内に挿入し狭くなった血管を広げる治療)においては、日本でも指折りのスーパードクターが揃っているようですが、どのような経緯で設立されたのですか。

鈴木院長(以下、鈴)：豊橋ハートセンターを開設する前は、国立診療所豊橋東病院にいました。わたしが着任したばかりの頃は、この循環器内科の認知度は低く、患者さんも少なかったです。それから他の医師や看護師の協力を得て、年ごとに実績を伸ばしていき、平成に入ると年間1000例以上のカテーテル治療を行うまでになりました。しかし、より多くの患者さんが来院されるようになったことで、スタッフの不足や24時間体制への対応といった問題が浮き彫りとなり、高度な医療を提供するためには、民間の力による新しい施設が必要だと思ふようになりました。幸い、一緒に病院づくりをしてくれる仲間がいたので、資金面などの問題はあったものの、なんとか開業することができました。このとき、もっとも大切にしたのが患者さんを中心にした医療の実践です。当院では高度の治療はもち

ろんですが、患者さんが心地よく過ごしていただくためのホスピタリティに重きを置いています。昔みたいに、病院は単に病気を治せばいいというものではありません。せつかく病気が完治しても、患者さんの気持ちに配慮した接遇ができていなければ、患者さんは病院に不満を持ってしまいます。だから、医者にしても、看護師にしても、医療の専門職だからといって鼻を高くするのではなく、心の面でも患者さんをケアしないといけないかもしれません。たとえば、病院に来た患者さんは、誰もが不安な気持ちをもってきます。受付で長く待っているようだったら声をかける。何か困っているようだったら、状況に合わせてきめ細かく対応する。豊橋ハートセンターでは、そうした役割を担う「メディカルコンシェルジュ」を置いて、患者さんが受付・会計・病棟など、院内のあらゆる場面で困ることのないようにしっかりとサポートしています。

## 動脈硬化の原因は血管の炎症 乱れた生活習慣が心臓を悪くする

内山(以下、内)：豊橋ハートセンターには世界的な技術をもつドクターだけでなく、患者サイドに立ったケアができるエキスパートまでいるんですね。ところで、心疾患の患者さんが増えているとお聞きました。どのよう

な要因があるのでしょうか。

鈴：最初に心臓の仕組みから説明します。わたしたちの心臓は、休みなく全身に血液を送り出しています。つまりポンプの役目ですね。ところが、不摂生や老化などで血管が狭くなったリ、詰まったりします。そうすると、心臓に血液がいかなくなり、心臓を動かしている筋肉に酸素や栄養が届かなくなり、こうして心臓への血液供給が滞る状態を「虚血性心疾患」といいます。その代表的な病気が狭心症と心筋梗塞です。まず、狭心症から解説します。狭心症は一時的に血流が不足した状態で、胸痛や呼吸困難などが起こりますが、症状はしだいに悪化していきます。一方、心筋梗塞は心臓の周りを通っている冠動脈の中に血栓ができて、心臓の筋肉に血液と酸素がいかなくなるため、その部分の細胞は壊死していきます。だから、心筋梗塞は死に直結するので、一刻も早く処置しないといけないんです。

内：細胞が死んでいくのですか。それは恐ろしい病気ですね。では、なぜ狭心症や心筋梗塞になってしまうのでしょうか。

鈴：要因としては、動脈硬化があげられます。動脈硬化とは、動脈が厚くなった硬くなったリして、血液が流れにくくなった状態のことです。血管は高血圧や喫煙などで、一番内側の内皮細胞が傷つけられます。そこに悪玉コレステロールと呼ばれているLD

Lが入り込み、不要な物質である酸化LDLに変化します。そうすると、免疫システムを担うマクロファージと呼ばれる白血球が働きだし、酸化LDLをどんどん取り込んでいきます。しかし、大量の酸化LDLを含んだマクロファージは泡沫細胞というものに変わってしまい、血管に沈着して血管内を狭くするんです。さらに、沈着したところが破れると、血栓ができて心筋梗塞や脳梗塞を発生します。このような説明をすると、コレステロールが悪者と思われがちですが、細胞を作る成分としてコレステロールは必要なものです。だから、薬でコレステロール値を下げすぎても意味がありません。注目すべきは、マクロファージです。マクロファージは炎症を起こ

すプロセスで、様々な働きをすることが明らかになっています。つまり、マクロファージが発生すること自体、血管内に炎症が起きていることを示しています。実際の研究でも血管の炎症を抑制することで、マクロファージによるコレステロールの取り込みが低下することがわかってきました。現在ではこうした研究成果を受けて、血管の炎症を抑える新しい治療薬の開発が行われています。

柳：コレステロールが動脈硬化を引き起こす本当の元凶ではないということですが、そもそも、どういったことが動脈硬化につながるのですか。

鈴：「高血圧」「喫煙」「肥満」「高血糖」「ストレス」などが、動脈硬化を進める危険因子です。これらの多くは自分

